

淀城の石垣

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 松永 修平

はじめに

淀城跡は京都市伏見区淀本町に位置しており、京阪淀駅から歩いて約 5 分で淀城跡公園に着きます。淀城跡公園には、淀城の本丸と天守台の石垣が今でも残っています。周辺では、これまで数多くの発掘調査が行われ、多数の成果があげられてきました。ところで平成 30 年度に、二ノ丸の東限が想定される位置で発掘調査を行ったところ、堀の石垣を発見しました。石垣は、現在も残る天守や本丸の石垣とは石材の加工度や大きさなどが明らかになりました。このような違いが何を意味するのかについて見ていきたいと思ひます。

1、淀の歴史と景観

淀の地は現在の宇治川・桂川・木津川の三川に囲まれた地に位置しています。ただし現在の地形は、江戸時代以降の河川改修に伴うもので、それまでは宇治川は現在の納所の交差点付近で桂川と合流し、木津川は淀城跡の西側で合流していました。

文献資料に初めて淀の名前が登場するのは、『日本後紀』の延暦 23 年 (804) 7 月 24 日条で、桓武天皇の与等 (淀) への行幸の記事です。中世には、魚市や淀津が存在しており、淀津は京に運び込まれる海産物をはじめとする物資の集散地でした。

淀城は大きく 3 つあります。戦国時代には、永生元年 (1504)、執政・細川政元に対して謀反を起こした薬師寺元一が城を占拠したことが『細川両家記』に記されており、これが文献資料に見られる「淀城」の初出と考えられています。この淀城は天正元年 (1573) 織田信長によって攻め落とされましたが、どこに所在していたかについては不明です。その後天正 17 年に豊臣秀吉が淀君の産所として淀城を築城します。この淀城は、現在の淀城跡より約 500 m 北の納所に存在していたと考えられています。これは「淀古城」と呼ばれているもので、伏見城の築城後に廃城となりました。現在天守が残る淀城は、伏見城の廃城に伴い徳川 2 代将軍秀忠の命により松平定綱が元和 9 年 (1623) から寛永 2 年 (1625) にかけて築城したものです。江戸時代中期の書物『淀古今真佐子』には、廃城となった伏見城の資材が転用されたことが記されています。松平定綱以降、淀城には永井尚政、石川憲之、戸田光熙、松平乗邑、稲葉政知といった譜代大名が居城し続けました。2 代目の城主永井尚政は、木津川の付け替え工事を行い城下町の拡張・整備を行いました。江戸時代を通じて淀は、城下町・港町・宿場として繁栄しました。宝暦 6 年落雷により天守台や本丸が焼失しています。また、鳥羽・伏見の戦いでの際には、淀藩は、敗走する幕府軍の入城を拒み、そのことに怒りを買った幕府軍は城下に火が放ちます。明治 4 年、淀城は廃藩置県に伴い廃城となり、石垣は現在も残る本丸や天守を除き、淀川や木津川の河川改修工事などで取り去られ現在に至ります。

2、近世城郭における石垣の変遷

城郭に石垣は、天正期以降に全国的に築城が行われる中でより整った石垣へと変化していきます。近世城郭の先駆けといわれる安土城は、天正 4 年 (1576) に織田信長により築城が始められ、「天主」を中心とした総石垣造りの城です。城郭の石垣の技術的な向上のきっかけとなったのは豊臣秀吉による肥前名護屋城 (1591 年) の築城です。秀吉は、文禄・慶長の役の際の全線基地として名護屋城の築城を開始します。その際に全国各地から大名が集められ、名護屋城の築城に携わり石垣普請などの諸技術が受容・伝播していったと考えられています。慶長 5 年 (1600 年) の関ヶ原の合戦以降、徳川政権下で新たに配置された大名が行なった普請や、名古屋城など巨大城郭の天下普請によってさらに石垣構築技術が発達します。元和期になると一国一城令などの統制の下で、より美しく効率的な石垣の技術が求められていくことになります。

石垣は、石材の加工法と石の積み方に密接な関係があります。

石垣には、「野面積み」「打込接ぎ」「切込接ぎ」の 3 つがあります。石垣初期の技法は、大きさの異なる自然石や粗割りした石を組み合わせて積み上げる「野面積み」です。石の隙間には間詰石を詰めるのが一般的です。1600 年以降になると、石を打ち欠いて形を整え、石同士の隙間を減らす「打込接ぎ」の技法が用いられるようになり、より高く、急な勾配の石垣を構築することができるようになりました。また、元和期以降、方形に整形した石材を密着させて積み上げる「切込接ぎ」の技法が用いられるようになります。その他、石を整形する際の石割の技術である矢穴技法からも、変遷を追うことができます。

また石積みする方法として大きく「布積み (整層積み)」と「乱 (層) 積み」の 2 つがあります。布積みは、同程度の大きさの石を用いて横の目地を通す方法です。目地が通っているため強度に問題はありますが、比較的簡単に積むことができます。乱積みは、不揃いの大きさの石材を用いるため、横の目地は通りません。積み上げには高い技術が必要とされます。さらに、慶長期前半以降に見られる石垣の隅石の積み方に、石材の長辺と短辺を交互に積み重ねることで強度をあげる算木積みと呼ばれる技法があります。

3、これまでの主な調査成果

【本丸・天守台】 1977 年に伏見城研究会が、天守台の 4 面石垣立面図の作成や天守台南西隅・北東隅の試掘調査を行い、南西隅で地下施設の存在を、北東隅では犬走りの状況を確認しました。その後 1987 年に天守台の本格的な発掘調査を行い、地下施設が石蔵であることが判明し、さらにこの石蔵が宝暦 6 年の落雷により全体的に激しく焼けていることもわかりました。またこの時の調査で石垣の測量・石材や刻印の有無などの確認も行なっています。天守台の石垣は、上辺が南北 24.5 m、東西 26.5 m の東西方向にやや長い長方形をしています。下辺は、内堀の水面で測って南北 31 m、東西 33.5 m です。高さは、水面からで 9.5 m です。石の積み方は、四隅ともに算木積み、面は「打込接ぎ乱積み」です。石材の産地として考えられているのは、鞍馬・嵐山、加茂・笠置、山科、宇治、白川、六甲であり、中でも多く用いられているのは加茂・笠置、山科、白川方面を産地とするものです。

【東・南曲輪・内堀・中堀】 1999 年から 2011 年まで京阪本線淀駅の駅舎移転および周辺の高架化

工事に伴い調査を行ってきました。2003年には、淀城期に属する『山州淀城府内之図』（京都府立総合資料館蔵）や『朝鮮人来聘記 付図』などに描かれる米蔵を検出しました。2006年、2010年、2011年には、東曲輪や南曲輪および中堀の石垣を検出しています。石垣は、石材に加工されている割合が低く、花崗岩が主に用いられ、石材の積み方は「野面積み」です。一方、隅石部は検出していないため算木積みがなされているかについては不明です。

【二ノ丸跡の調査成果】

2018年、二ノ丸の東と推測される場所の調査を行なったところ、二ノ丸の東側の内堀に面する石垣を検出しました。これまで二ノ丸では本格的な調査は行われておらず、今回初めてその石垣を検出することができました。検出した範囲は、延長約17m、高さは1.4mほど、最大で石積み3段分です。石垣の上部は抜き取られており、また基底部は確認できませんでしたが、少なくともさらに2段は埋設していることを確認しました。このことから、石垣の本来の高さは最低でも4mはあり、今回は石垣の中位を検出したと考えています。石垣の積み方は、布積みを基本としていますが、石材の大きさが大小様々であることから、横の目地が揃わない部分も見られます。検出した全35石中9石に、石を割るために穿つ矢穴跡を確認しました。この矢穴跡の形状が慶長期前半の特徴を有していることがわかりました。このことから、今回検出した石垣の石材は、松平氏が築城した際に新調したものではなく、伏見城の廃城石を転用した可能性が高いと考えられます。

4、伏見城の石垣

伏見城は、豊臣秀吉が指月の丘に隠居をするための城館を造ったことから、その歴史が始まります。慶長の大地震（1596）で倒壊した後、範囲を木幡山全域に広げ本格的な城郭を構築します。秀吉の死後は、徳川家康の実質的な支配下となりますが、関ヶ原の戦いの前哨戦（1600年）の際に、西軍の攻撃を受け落城してしまいます。しかし、立地的な重要性から、翌年の1601年には再建を開始し、徳川家の拠点として整備されます。その後、京都の拠点として二条城が造営・整備されることなど、伏見城の政治的な存在意義は失われ、元和9年（1623）に徳川家光の将軍宣下を最後に廃城となります。廃城後、伏見城の石垣などの資材は、淀城や大坂城に転用されたと考えられています。

これまでの調査で発見された石垣や、現在も残る石垣についてみていこうと思います。

慶長の大地震で倒壊する前の段階である、いわゆる指月伏見城（1592築城開始）の段階の石垣は、主に大形の粗割石と自然石を用いて石垣を構築しています。

豊臣秀吉の木幡山伏見城以降（1596～）の段階では、加工度は低いものの、花崗岩を使用しています。

伏見城の石垣を見ることで、指月伏見城期の城粗割石や自然石の使用を使用していましたが、木幡山伏見城期になると、より加工のしやすい花崗岩を用いるようになったことがわかります。

5、淀城の石垣に残る刻印

淀城の石垣には、各大名の刻印が残っています。刻印が示しているのは、大名の名前、官職名、大名の家紋・略紋、家臣の家紋・略紋、日付、石の数、作業単位を表すもの等、多くの種類のもの

があります。曲輪などで検出した石垣に見られる刻印は大半が加賀の前田家の符号です。本丸や天守台の調査で確認された石垣には、安芸の毛利家・稲葉家・肥後の加藤家・結城家・岡山の池田家・土佐の山内家・平戸の松浦家など多岐にわたる符号があります。伏見城跡の石垣や石切場の石材に見られる刻印や墨書からも淀城の石垣と共通するものが見つまっていることから、淀城の石垣は伏見城の廃城石を使用していると考えられます。

まとめ

淀城の本丸や天守台の石垣は、「打込接ぎ乱積み」、四隅には算木積みという技法で積まれています。一方で、南曲輪や東曲輪、内・中堀、二ノ丸で検出した石垣は、主に花崗岩の割石が主に用いられています。また、石の積み方も布積みや野面積みが用いられています。

淀城の石垣と同時期に拡張工事が行われた二条城の石垣とをしてみると、二条城の石垣は切石が用いられていますが、淀城の石垣では、割石を用いているなど同時期に築城されたものとは思えないほどの違いがあります。これは、淀城の石垣の石材が、伏見城の石垣を用いて築城したことがこの違いを生み出していると考えられます。伏見城からの転用材を使用していることから、本丸や天守台、二ノ丸や東曲輪や南曲輪などの石垣にも多様な特徴がみられていると考えられます。

表1 淀城関連年表

延暦23年(804)	桓武天皇が「与等津」へ行幸する。『日本後紀』
大同5年(810)	平城天皇太子の変(藤原薬子の变)に際し、淀市津に頓兵が置かれる。『日本紀略』
貞観16年(874)	淀渡口周りの人家が三十余軒洪水で流失。
寛元年間(1243~47)	淀納所と中島が淀小橋で結ばれる。『山城淀下津町記録』
応長元年(1311)	淀の魚の市で為替が用いられる。『庭訓往来』
永生元年(1504)	薬師寺元一、主君細川政元に反し淀の城を占拠する。『細川両家記』
永禄2年(1559)	管領細川氏綱が淀の城に入る。『細川両家記』
元亀3年(1572)	織田信長の将細川藤孝(幽斎)が淀城を攻撃する。
天正10年(1582)	本能寺の変の際に、明智光秀の前線基地となる。
天正15年(1587)	豊臣秀吉、聚楽第を完成させる。
天正16年(1588)	豊臣秀吉、淀に築城を命じる。(淀古城)
天正17年(1589)	3月淀城完成。9月淀君、大坂城へ移る。
文禄元年(1592)	指月伏見城築城開始。
文禄3年(1595)	淀城破却。
慶長元年(1596)	慶長大地震で伏見城倒壊。
慶長2年(1597)	伏見城の天守完成。
慶長3年(1598)	豊臣秀吉、伏見城で死去。
慶長5年(1600)	伏見城、関ヶ原の合戦前哨戦で焼失。
慶長6年(1601)	徳川家康、伏見城復興。
元和元年(1615)	大坂城落城。
元和9年(1623)	伏見城、破却。松平定綱が3万5000石で入封し淀城築城開始。
寛永2年(1625)	淀城完成。
寛永3年(1626)	徳川秀忠・家光、上洛時に淀城に入る。
寛永10年(1633)	永井尚政、10万石で入封。
寛永14年(1637)	永井尚政、木津川の付け替え工事と城下町の拡張を行う。
寛文9年(1669)	石川憲之、6万石で入封。
宝永8年(1711)	戸田光熙、6万石で入封。
享保2年(1717)	松平乗邑、6万石で入封。
享保8年(1723)	稲葉政知、10万2000石で入封。
宝暦6年(1756)	落雷により天守、本丸、二ノ丸など焼失。
慶応4年(1868)	鳥羽・伏見の戦いで幕府軍の入場を拒み、城下炎上。
明治元年(1868)	木津川の付け替え工事(~明治3年)
明治4年(1871)	廃藩置県により淀県の成立。
明治7年(1874)	淀城の石垣の解体工事、石垣は河川改修に用いられる。
明治43年(1910)	京阪電鉄開通。
大正13年(1924)	淀競馬場開設。
昭和32年(1957)	淀町、京都市伏見区に編入。

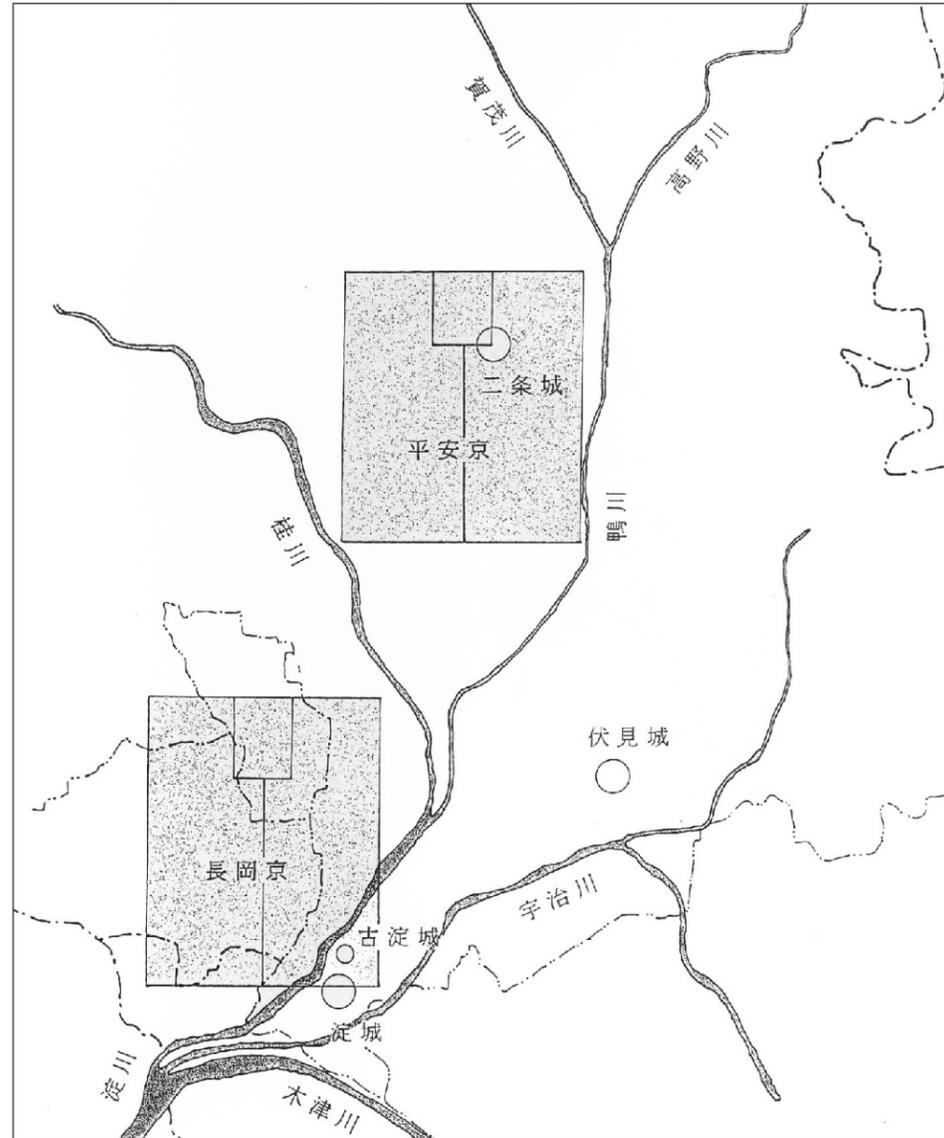


図1 平安京・淀城・伏見城の位置関係

西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年より一部改変

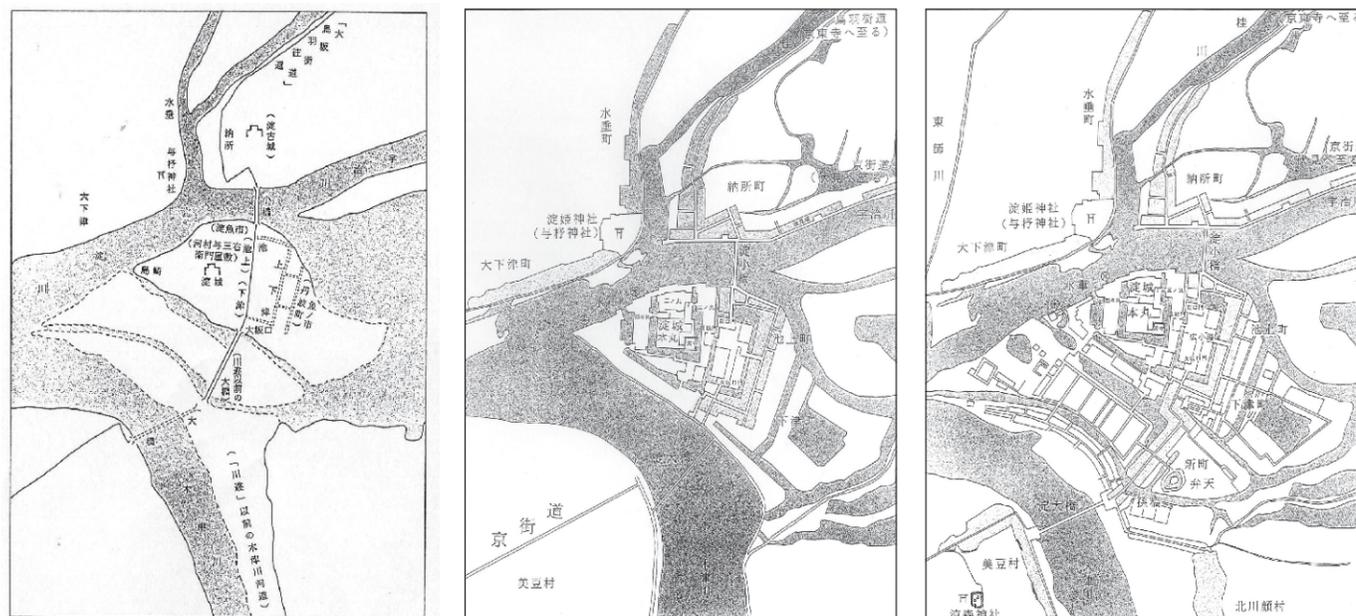


図2 元和9年以前の淀、寛永14年 永井尚政による河川付け替え前後の淀城の様子(左が元和9年以前、中央が付け替え前、右が後)

主要参考文献

田中哲雄 『日本の美術12 No.403 城の石垣と堀』 1999年
 西川幸治編 『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年
 星野猷二・三木善則 『器瓦録想 其二 伏見城』 伏見城研究会 2006年
 星野猷二・三木善則 『器瓦録想 其三 淀城』 伏見城研究会 2007年
 尾藤德行・丸川義広・能芝勉 『長岡京跡・淀城跡(6次調査)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23 2007年
 尾藤德行・長戸満男・南出俊彦 『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-7 2010年
 尾藤德行 『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-17 2011年
 高橋潔・菅田薫・竜子正彦 『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-7 2012年
 森岡秀人・武内良一・久保孝・中川亀造・青地一郎 『伏見城関連の石切場について-「豊徳」期における石垣石材調達をめぐる所見の二、三-』 山科石切場調査・研究グループ 2015
 江谷寛・三木善則編 『淀城跡(天守台)』伏見城研究会発掘調査報告書 2017年
 松永修平 『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-14 2018年

図1、2、表1 西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年より

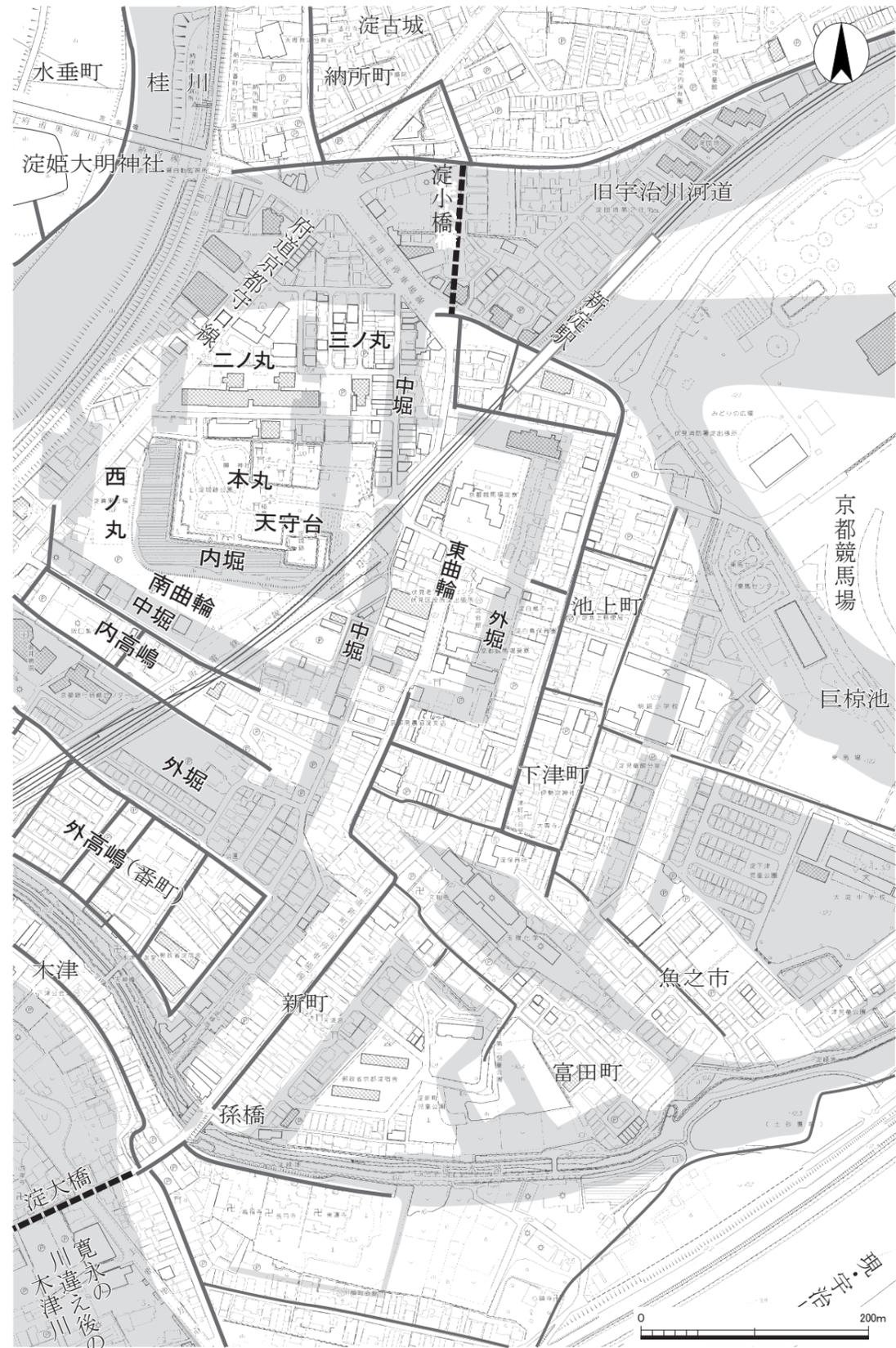


図3 淀城周辺主要調査位置図および淀城復元図

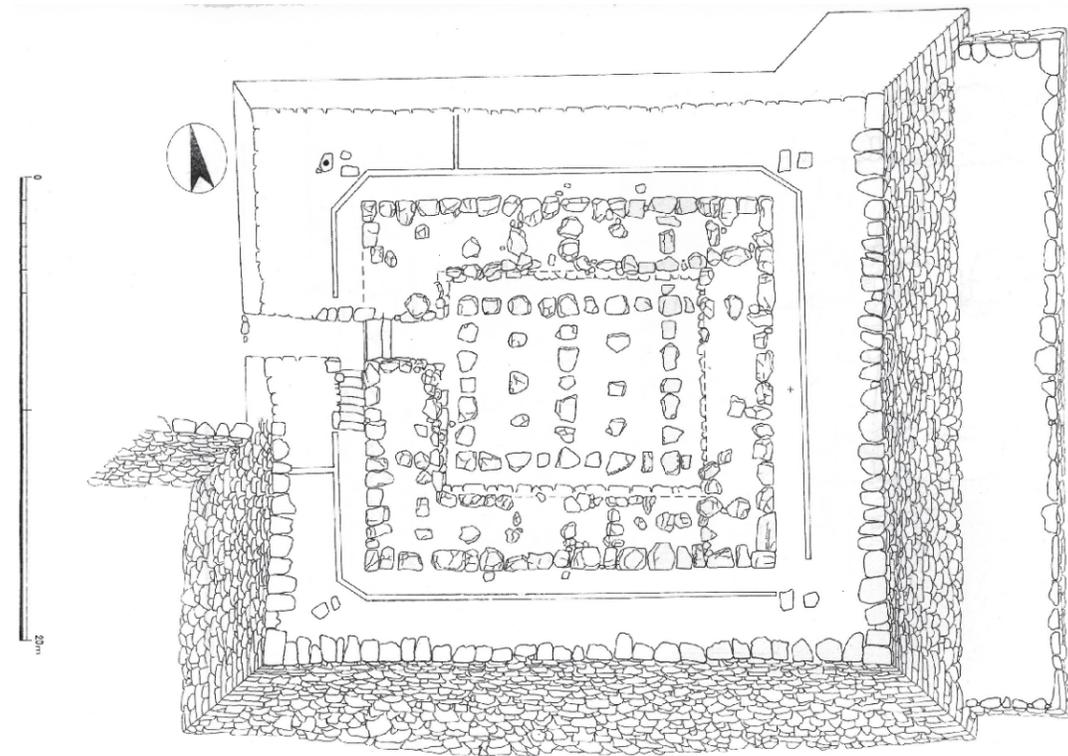


図4 淀城天守台上面全体図 (1 : 300)

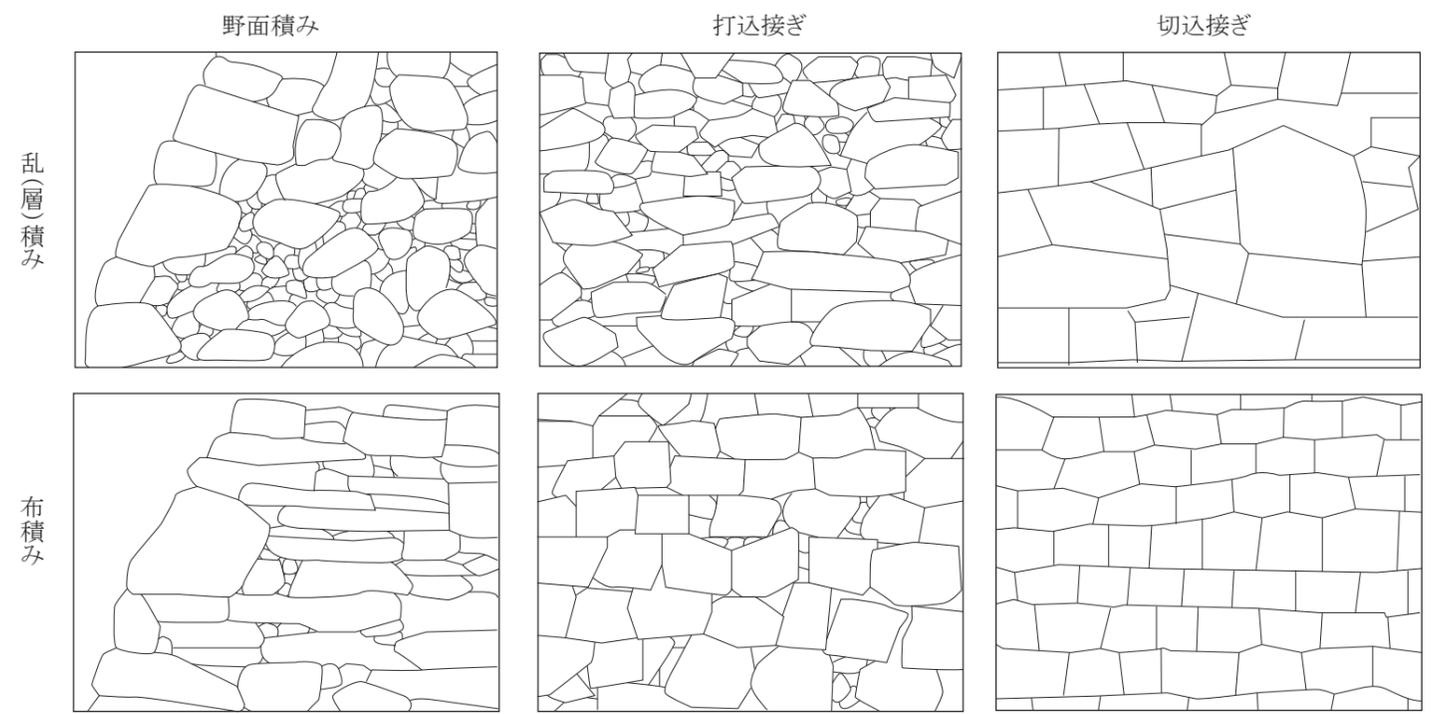


図5 石垣の変遷

図3 高橋潔・菅田薫・竜子正彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-7 2012年一部改変
 図4 江谷寛・三木善則編『淀城跡(天守台)』伏見城研究会発掘調査報告書 2017年より

淀城 東曲輪・南曲輪・内堀・中堀

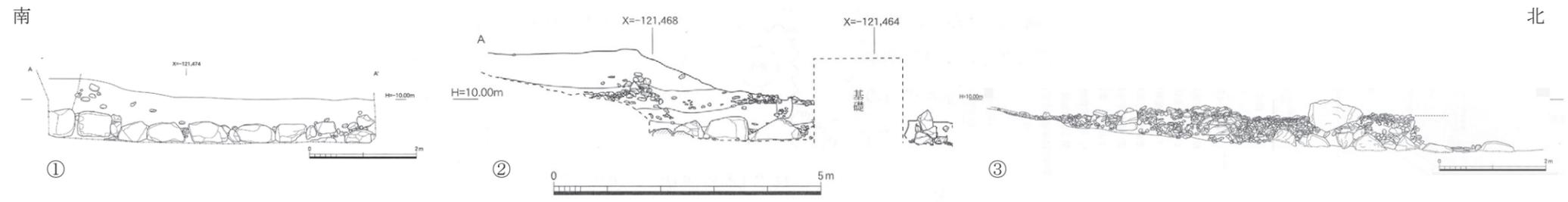


図6 本丸東の曲輪と中堀の石垣

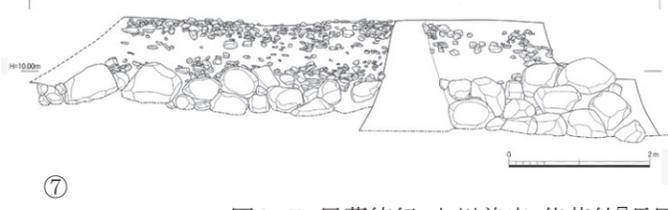
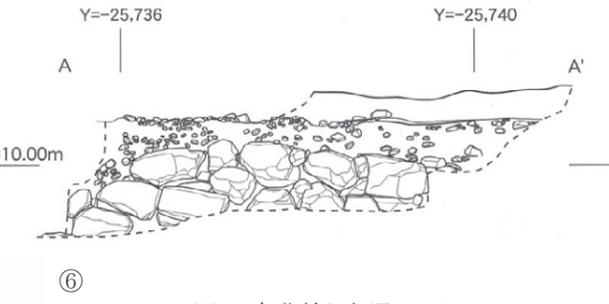
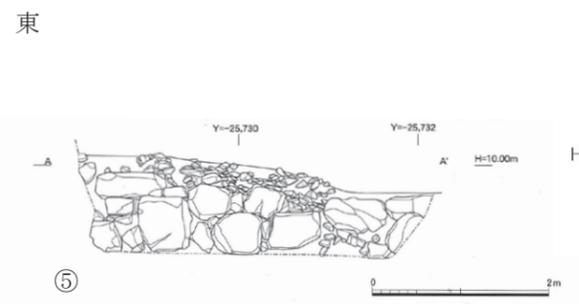
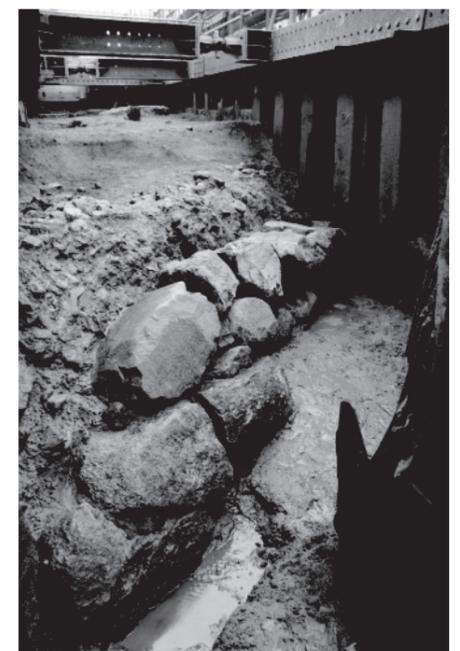
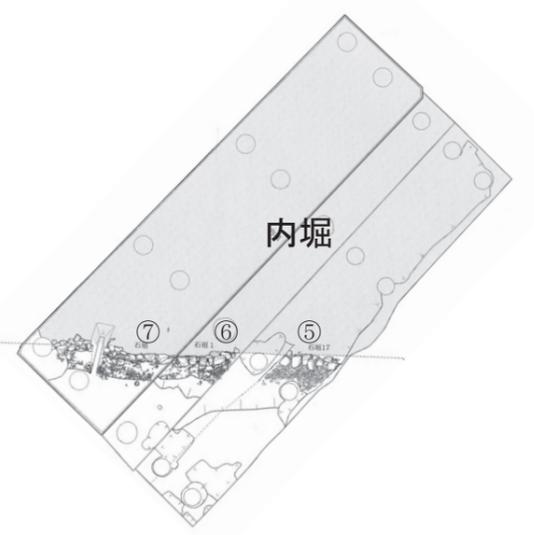
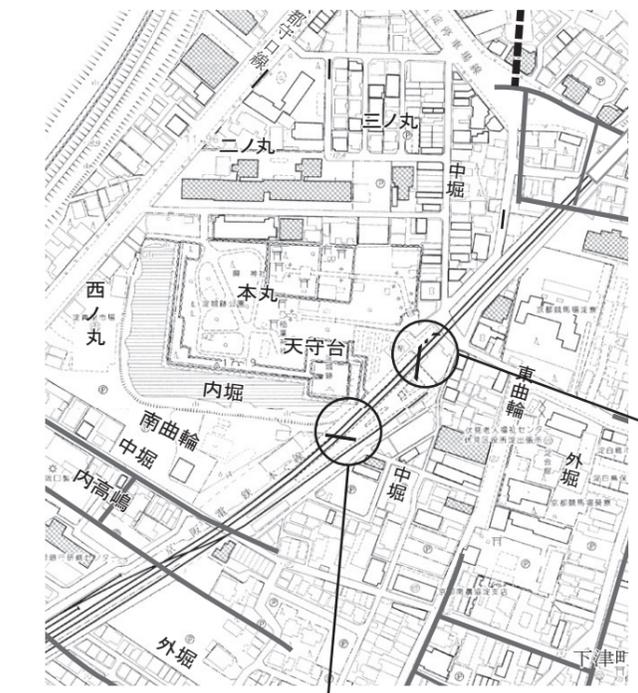
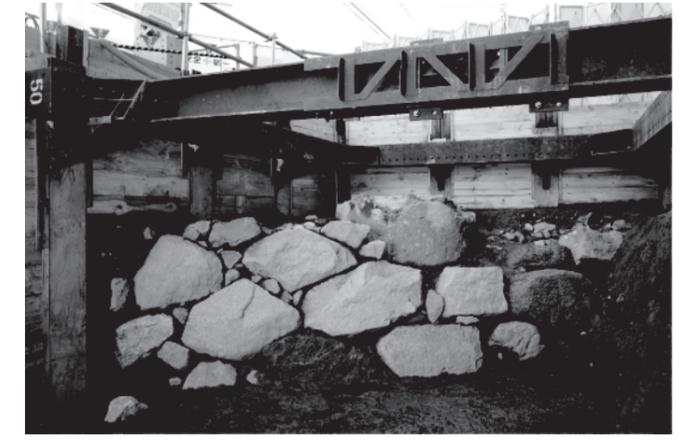
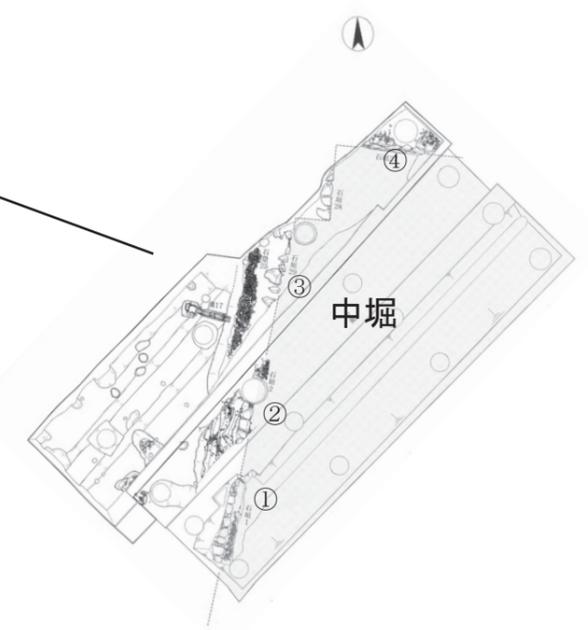


図7 南曲輪と内堀の石垣

図6、7 尾藤徳行・丸川義広・能芝勉『長岡京跡・淀城跡(6次調査)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23 2007年
尾藤徳行・長戸満男・南出俊彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-7 2010年
高橋潔・菅田薫・竜子正彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-7 2012年 より

二ノ丸跡



2018年調査位置図

図8 調査区平面(1:150)

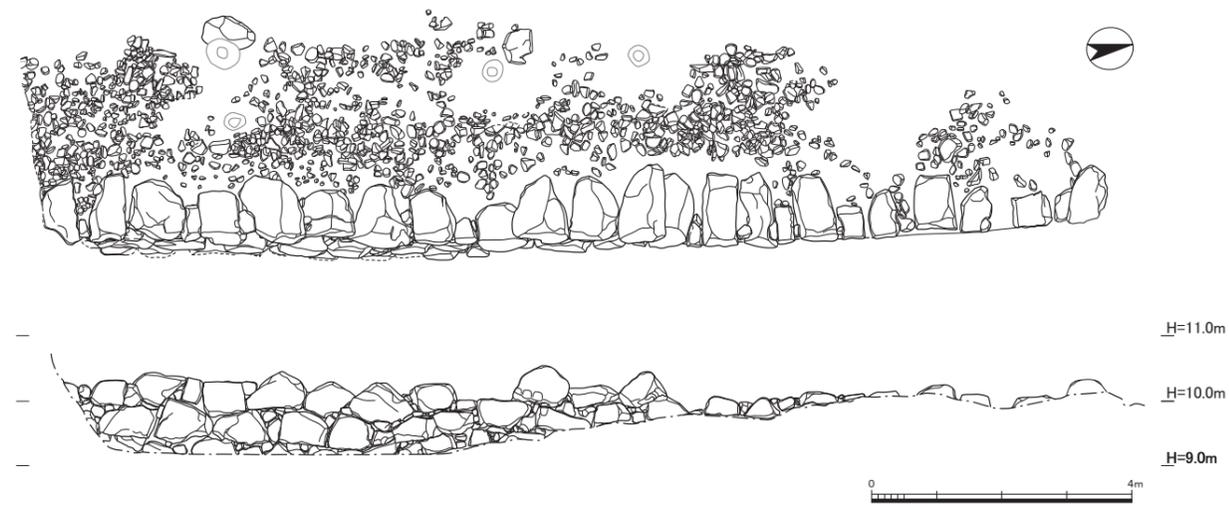


図9 二ノ丸石垣塀立面図(1:100)



①



②



③



④



⑤

図10 ①調査区全景(北西から)、②石垣(南東から)、③~⑤矢穴跡

伏見城跡

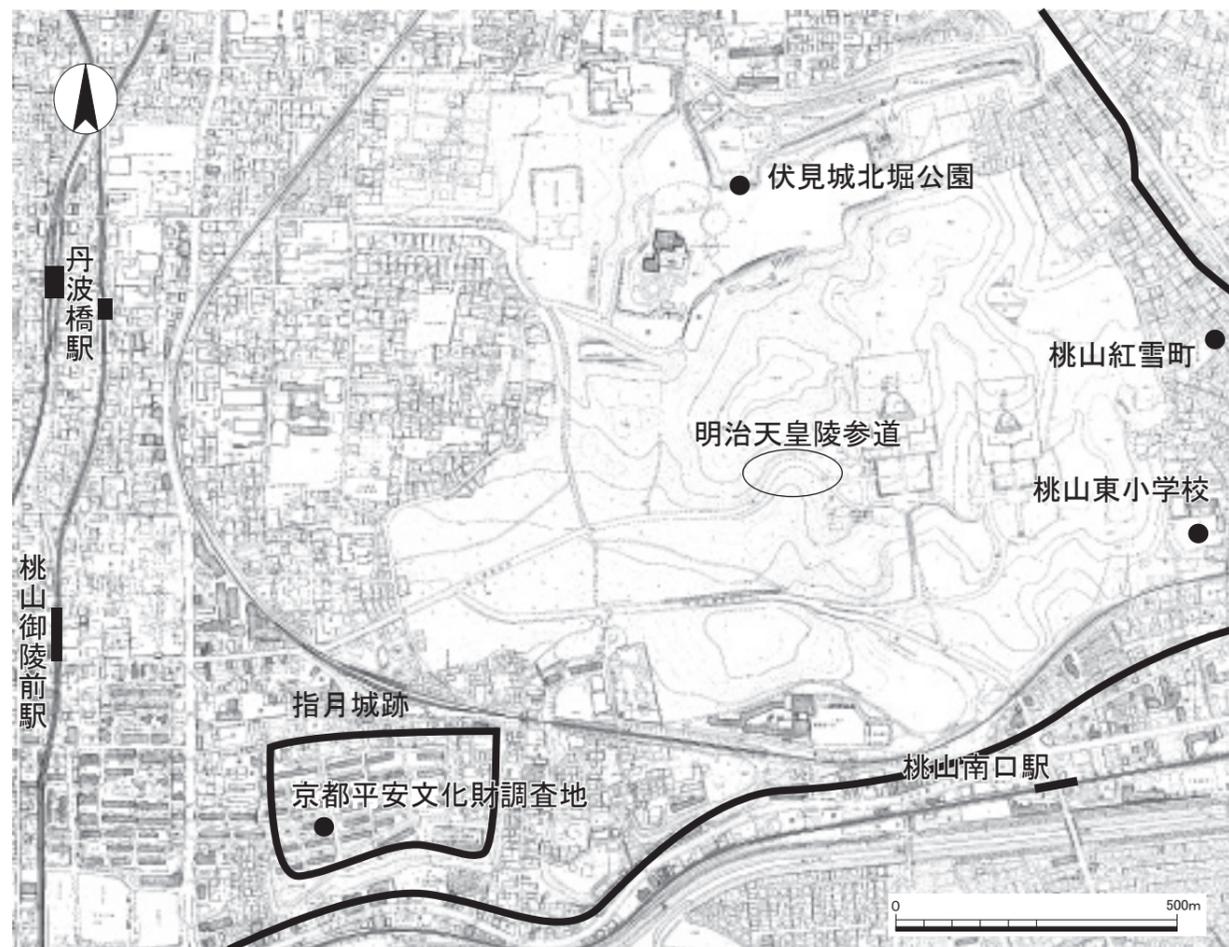


図 11 伏見城跡周辺図

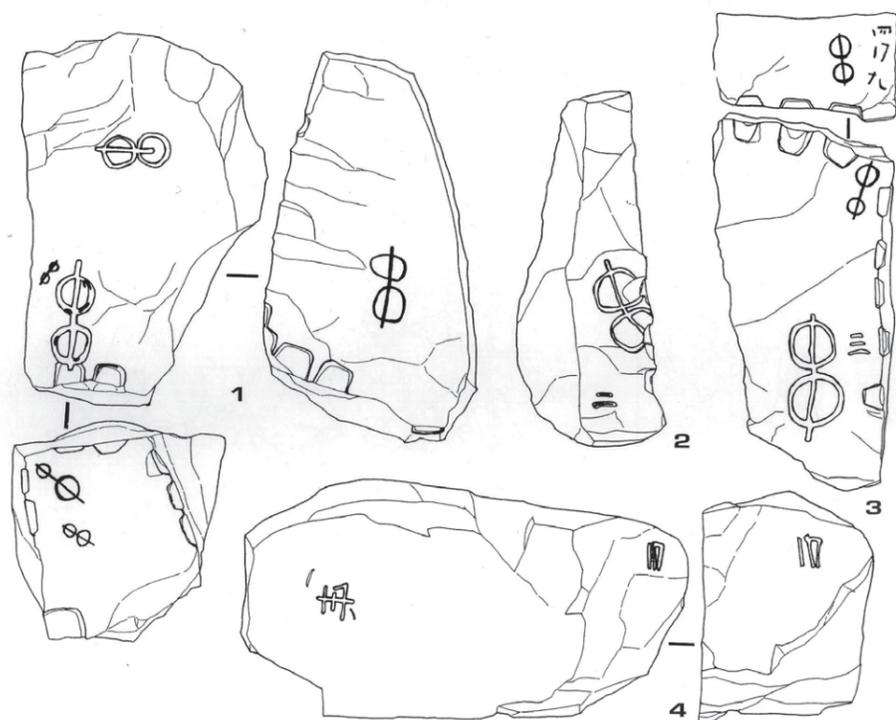


図 12 伏見城跡北堀公園出土の転石に残る刻印・朱書

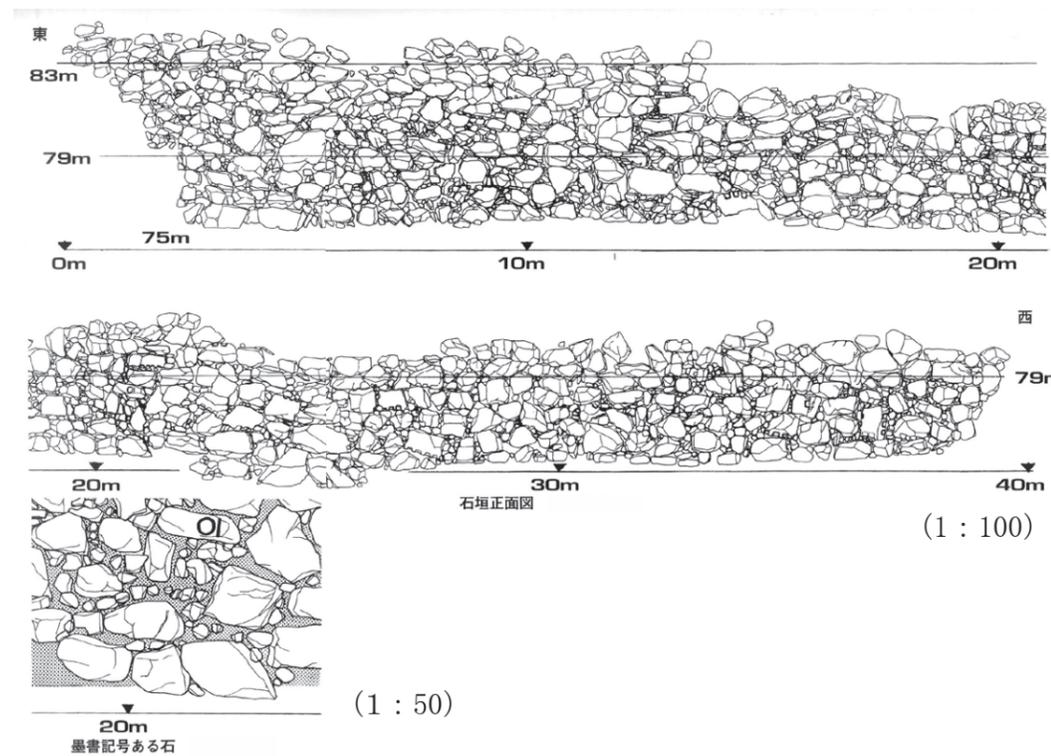


図 13 伏見城跡北堀公園石垣正面図

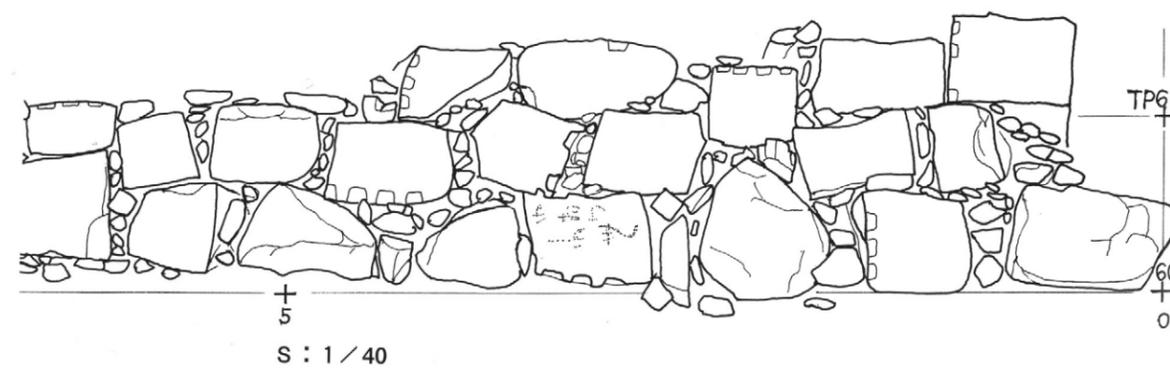


図 14 伏見城跡 桃山町紅雪検出石垣立側面図 (1:40)



図 15 明治天皇陵参道に残る伏見城廃城石

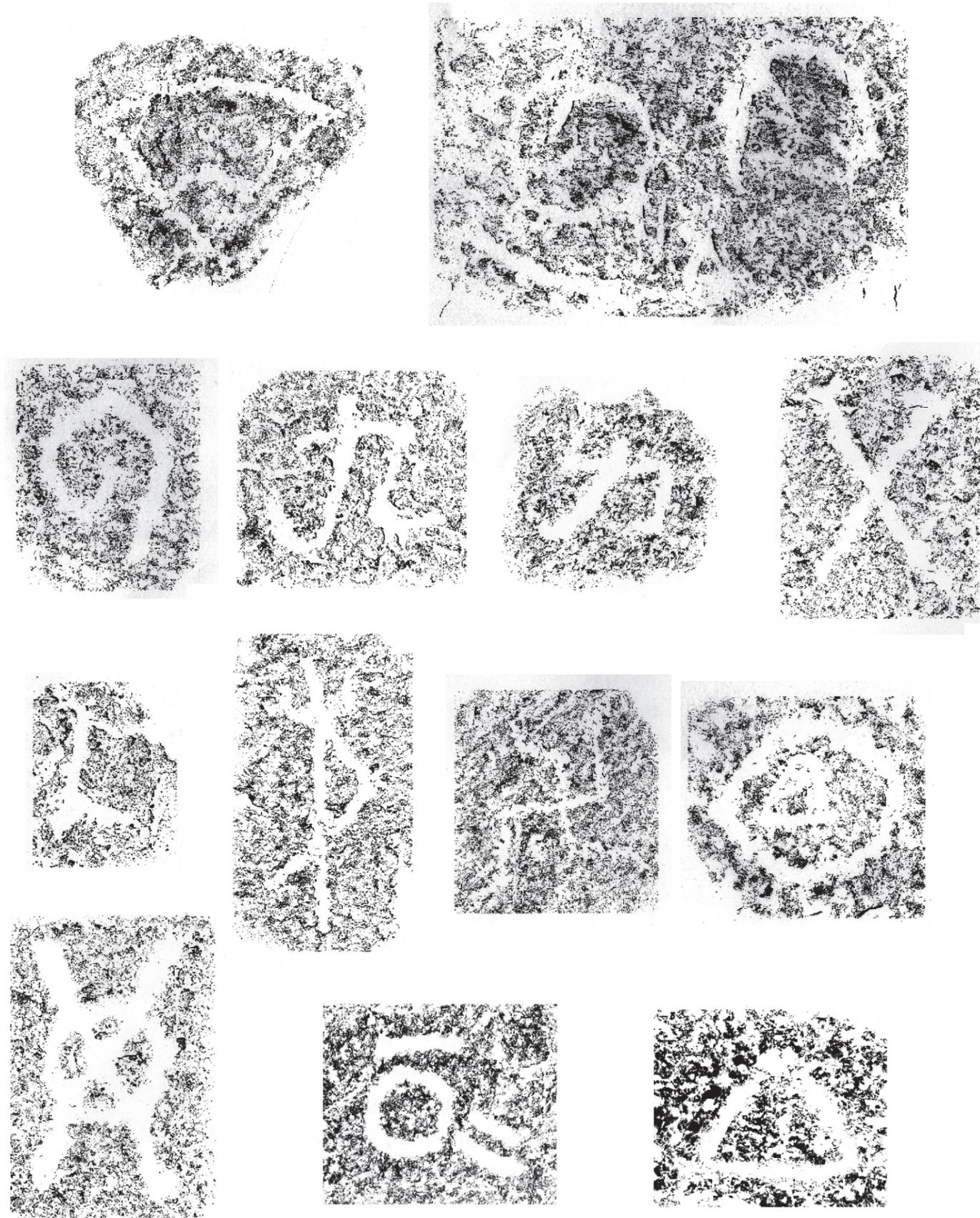


図16 淀城跡調査で確認した石垣に残された刻印

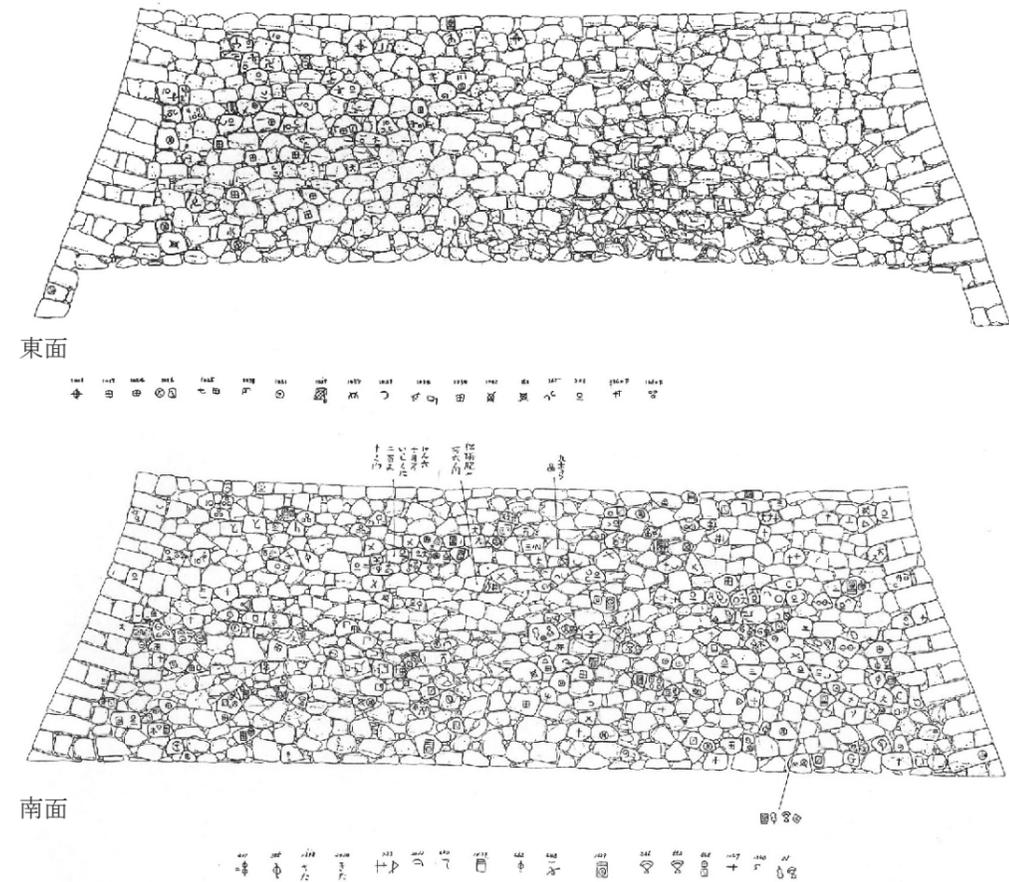


図17 淀城天守台石垣に残された刻印

- | | | |
|---|-----------------------------|-------------|
| A | △ X △ X 中 中 卍 回 □ 田 木 の 耳 弓 | |
| | ⊙ ㊦ ㊧ ㊨ = 卍 ⊕ ⊗ ⊕ | 前田利常・利長(加賀) |
| B | ○ ㄣ = 大 | 毛利輝元(安芸)か前田 |
| C | ⊖ | 稲葉貞通(美濃) |
| D | ⊙ | 加藤清正(肥後) |
| E | ⊖ □ | 池田輝正(三河)か前田 |
| F | ⊖ ⊖ | 結城秀康(下総)か前田 |
| G | ⊕ | 加藤貞泰(美濃)か前田 |

図18 淀城本丸・天守台調査で確認された刻印の一例

図16 尾藤徳行・長戸満男・南出俊彦 『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-7 2010年
 高橋潔・菅田薫・竜子正彦 『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-7 2012年 より
 図17 西川幸治編 『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年より
 図18 星野猷二・三木善則 『器瓦録想 其の三 淀城』伏見城研究会 2007年 より